

# 反核医師ジャーナル

第55号 発行：核戦争に反対する医師の会・愛知  
2007年3月30日  
vol.26 No.1  
(名古屋市昭和区妙見町19-2  
愛知県保険医会館気付  
TEL052-832-1345)

## 生きているうちに、原爆症と認めて！



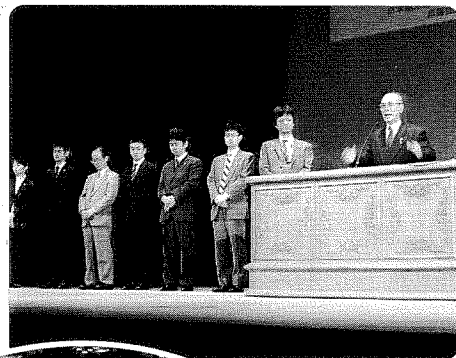
### 25周年記念のつといのご案内

「核戦争に反対する会・愛知」は結成25周年を記念して、下記のとおり講演歌声のつといを開催します。

講師の直野章子氏の祖父は広島で被爆して間もなく死去、母親も被爆者といひます。「祖父を原爆で殺された。私はなぜ祖父に会えないのか」との怒りが被爆者の問題を研究する原点にあるという、直野さんのお話を聞きます。

- と き 6月2日(土)午後2時30分～5時
- と ころ 中京大学・名古屋キャンパス「ヤマテホール」  
(地下鉄「八事」下車5番出口)
- 内 容 講演と歌声で、核廃絶と被爆者の願いを謳う  
講 演 直野 章子氏(九州大学助教授・社会学)  
歌 横井久美子さん(シンガー・ソングライター)

上は、判決日に入廷前集会のあと法廷に入るために並んだ原告3人と被爆者  
右は、判決後上京して全国集会で決意表明する原告の甲斐昭さんと弁護団(日比谷公会堂)



判決後の報告集會に参加した支援者(弁護士会館・大ホール)  
写真はすべて1月31日に撮ったもの

原爆症認定訴訟 名古屋地裁判決

個別的状況無視の認定方針を  
明確に批判したが、二人は原爆症  
と認め二人は否認



1月31日午前、名古屋地裁判決の報告（名古屋地裁前で）

「原因確率」論

の機械的適用が誤った判断に

名古屋地裁

は、国が行ってきた被爆者行政の問題点について総論部分で次のように明確に批判した。「被爆者ごとに被爆状況が違うことを無視して認定方針に原因確率論を機械的に適用すると、実態を反映せず発症との因果関係の判断を誤ることになる。そうなら

この総論については、昨年五月の大阪地裁、八月四日の広島地裁判決の精神を引き継いでものであり、各地の裁判の中で原告が主張し続けている国の被爆者行政の問題点・認定基準の矛盾を認め、その改善を促す内容になっている。

※原告団が国と争っている最大の論点・入市や遠距離で被爆した人たちも、当時、国が認定対象と限定する近距離被爆の人たちと同様な急性症状を起こし、その後も癌など放射線に起因する疾病を発症している事実を説明できないこと。それは、国の原爆症の認定基準が、直爆による初期放射線しか評価せず、残留放射線や被爆者が体内に取り込んだ放射性降下物による内部被曝、遠距離で浴びた黒い雨や放射性降下物の影響を無視してきたからだ。

原告への判断、医学的知見  
「こじごわり過ぎ」

一方、各論となる四人の原告の原爆症についての判断は、前記の総論の明快さが貫かれず、二人を原爆症と認め二人を認めずと、半々に分かれてしまった。

仙台と東京地裁で判決

認定基準の機械的適用を批判し、原爆症と認める

三月二十日に仙台地裁(原告二名)、二十二日に東京地裁(原告三十名)でそれぞれ判決が行われ、仙台の二名、東京の二十一名を原爆症と認めた。原爆症の認定審査にあたっては、大阪・広島・名古屋の流れを引き

継ぎ、「被爆状況・被爆直後の行動、急性症状の有無や態様など、被爆者の個別・具体的な状況を考慮に入れて総合的に判断すべきであって、DS86や原因確率などを機械的に当てはめるべきでない」としている。

兵士として被爆直後から広島

の爆心地付近まで入り救援にあたった入市被爆者の甲斐昭さんと、広島の国民学校の校庭で被爆した小路妙子さんの二人については、厚労省の認定却下を取り消し原爆症と認めたが、長崎の三菱造船所で被爆した中村昭子さんと広島比治山の通信基地で被爆した森敏夫さんは、病名と放射線との因果関係が充分説明できないとして認められなかった。

こだわり過ぎていると批判した。ただ、集団訴訟の前までは絶対通らなかつた甲斐さんのような入市被爆が認められたことは裁判の大きな成果だと述べた。

国も、中村・森さんも控訴  
次は高裁へ

国は原爆症と認められた甲斐、小路さんの二人について二月八日に控訴。原爆症と認められなかった中村、森さんの二人も「原爆さえなかつたら、自分たちはこんな苦しみに済んだ。私たちの病気は原爆のせいだと認めさせるまで闘う」と決意表明し、二月十四日に名古屋高裁に控訴した。

この判断の分裂について、物理学者で被爆者でもある沢田昭二名大名誉教授は、「総合的判断」の見地が貫かれず当時発症した急性症状を無視して今の疾病に

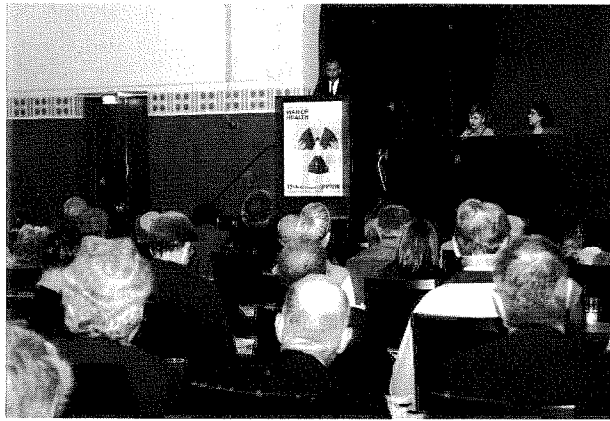
一月三十一日に名古屋地裁で行われた原爆症認定集団訴訟の判決には、愛知の支援者だけでなく各地から被爆者や弁護士ら二百五十人が駆けつけて判決を見守り判決後集会を行った。

断を誤ることになる。そうならないために一人ひとりの被爆状況や被爆後の急性症状なども考慮して個別・具体的な事情を考慮しつつ、総合的に判断すべきである」。

第17回IPPNW世界大会(The sinking Finland)報告

核兵器廃絶が世界の主流に

中川 武夫



全体会議で発言する秋葉広島市長

第十七回核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の世界大会が「医師の使命 戦争か健康か」のテーマの下、フィンランドの首都ヘルシンキで、二〇〇六年九月八日から十日まで開催された。フィンランドでは一九八四年の第四回大会に続く二度目の開催である。

核戦争に反対する医師の会か

らは事務局・通訳を含め十七名が参加した。他にIPPNW日本支部と大阪・京都支部から二十五名と医学生参加があった。全体としては、五十を超える国から医学生百三十人を含む四百五十名以上が参加した。残念だったのは、北朝鮮からは三名が参加していたが、北東アジアのメンバーである前回開催国の中国からは学生の参加のみで、韓国からの参加が無かったことである。

大会に先立つ九月三日、中央アジア五カ国が非核地帯条約に調印したことは、うれしい情報であった。

開会の全体会議

大会は、三つの全体会議と一つのシンポジウム、二十五のワークショップが持たれた。八日は朝から開会の全体会議が始まった。

フィンランドのトゥオミオヤ外相は挨拶の中で「二〇〇五年のNPT再検討会議は全く期待を裏切るものであった。北朝鮮、イラン、インドなどの事態を見ても、核保有国の核軍縮への努力が求められる。核テロの脅威も中東問題も国際協力で解決せねばならない。二〇一〇年のNPT再検討会議に向けてあらゆる努力を払わねばならない。核戦争はさせなかった問題であり、核兵器の廃絶は緊急の課題である」と発言。

続いて、マツコイ共同会長は

「一九八〇年にIPPNWは創設された。人類が滅亡する前に核戦争を防止することが必要と考えたからだ。今日、核戦争の脅威は減ったかもしれないが、偶発的に発生する危険性はむしろ増大している。核兵器は廃絶しなければならぬ。最大の核保有国米国のダブルスタンダードが新たな危機を生み出している。核抑止論は危険な考えである。核兵器先制不使用を宣言しているのは中国だけ。ならず者国家・テロを口実に先制使用を正当化しようとしている。核を使用することこそ核テロ国家

反核医師の会、柳沢厚 労大臣に抗議と要請

核戦争に反対する医師の会・愛知は、二月十二日、柳沢厚労相に宛てて、国の控訴に抗議するとともに、原爆症認定基準を根本的に改め、全国で認定を求めて集団訴訟を闘っている二二九名の原告を原爆症と認めるよう要望書を送った。要望書では、被爆者について「病気のために働くことができ

ず経済的な困窮に陥り、また初期は自分に何の責任もない被爆を理由にいわれのない差別を受け、さらには生き残った自分を死者たちに対する罪と感じ自分を責めながら、ひたすら被爆の記憶を封印して生きてきた人もいます」「みな高齢化して残された時間は殆どないのです。被爆者の救済は時間との闘いです」として、「私の病気を原爆のせいだと認めてほしい!」という被爆者の切実な願いに応えるよう求めた。

と言わねばならない。IPPNWは先制不使用を訴えていかねばならない。米国は、なぜこうした考えを持っていないのか、建国の精神は何なのか、核で自国が守れると考えているのか、それとも今後米国が世界を支配できようにするためなのか。米国や同盟国が最も考えるべきことは『核廃絶』しかない。なぜこれが優先と考えられないのか。核抑止は危険な考えである。恐怖の中にあることではない。キューバ危機を忘れてしまったのか。核保有国への働きかけこそが重要である。

二〇〇五年のNPT再検討会議では十三のステップで核を廃絶するプログラムが提示された。これが実行されるようにすることが役割である。アメリカこそが核廃絶の最大の障害である。その障害を取り除くには、米国民の圧力が不可欠である。IPPNWは地雷廃絶運動に学んで、あらゆる核廃絶への動きを支持していく必要がある。核廃絶へ向けて、大衆的な力をつけなければならない。その力を二〇一〇年のNPTに結集すべきである。核保有国の国民の考えを変えなければならない。



ワークショップの会場、発言する日本からの参加者

「原子爆弾の長期に亘る身体的・遺伝的影響—広島と長崎」である。このWSは、

「スプーチン」が会場近くの街角で行われた。ターゲットXとは、ここが核兵器で攻撃されたら、といった意味で、道行く人に核廃絶を訴えるデモンストレーションであった。スプーチンは、スプーチンを振舞うことで、関心を持つてもらおうとするイベントであった。

ワークショップ(W S)については、私が参加した幾つかについて報告する。一つは、「原子爆弾の長期に亘る身体的・遺伝的影響—広島と長崎」である。このWSは、

「スプーチン」が会場近くの街角で行われた。ターゲットXとは、ここが核兵器で攻撃されたら、といった意味で、道行く人に核廃絶を訴えるデモンストレーションであった。スプーチンは、スプーチンを振舞うことで、関心を持つてもらおうとするイベントであった。

ワークショップ(W S)については、私が参加した幾つかについて報告する。一つは、「原子爆弾の長期に亘る身体的・遺伝的影響—広島と長崎」である。このWSは、

「スプーチン」が会場近くの街角で行われた。ターゲットXとは、ここが核兵器で攻撃されたら、といった意味で、道行く人に核廃絶を訴えるデモンストレーションであった。スプーチンは、スプーチンを振舞うことで、関心を持つてもらおうとするイベントであった。

「ウラン兵器の健康への影響」のWSは、いわゆる劣化ウラン兵器に関するもので、IPPN Wドイツ支部の主催であった。イラクのジャワード・アルアリ医師が、DUの影響と考えられる悪性腫瘍や先天性疾患についての症例と、そうした疾患が増加している実状について報告された。

ウラン兵器禁止を求める国際連合(ICBUW)の振津女史は、八月に広島で開催されたICBUWの大会報告とDU兵器の禁止を訴えられた。フィンランドや米国の代表からもDUの健康への悪影響を報告されたが、DUの影響については、まだまだ科学的に解明すべき点が残されているとの指摘もあった。影響がまだ未解明な点があるから

閉会全体会でも、多くの感動的なスピーチがあったが、ここでは創設期に共同議長であったチャゾフ氏の話の一部を紹介する。氏は、次のように述べた。「私達の目標は核兵器を廃絶することであるが、まだ達成できていない。さらに活動を展開しなければならない。どう活動していくのか。核廃絶のたたかいは、さまざまな人達が取り組まなければならないが、医師はリーダーシップを発揮しなければならない。医師の科学者としての知識を、患者さんに、周りに広げていかなければならない。医師にはそれができるのである」。

大会は、「平和を欲するならば、健康のために働け！」と題する大会声明と、二〇〇七年のIPPNWの五つの目標を承認して会議を閉じた。

IPPNWは冷戦時、米国のラウンとソ連のチャゾフ両医師の呼びかけで創設され、二人が共同会長となって運営されてきた。今回まではマレーシアのマッコイとスウェーデンのウエストバーク医師が共同会長を務めているが、マッコイ氏は今回で退任した。後任については大会後の理事会で選出されるが、アフリカから選ばれるようである。

発展途上国では、核戦争よりも、今、目の前で起きている小火器による戦乱と殺戮、それらによってもたらされている飢餓などに、より大きな関心を持たれるのはある意味ではやむを得ない事かとも思われる。冷戦時代とは一味違う運動体へと変わっていくのであろうか。

次回のIPPNWの大会は二〇〇八年インドのデリーで開催される予定。道理で、インドからの参加者が目に付いたのも納得できた。来年六月には、モンゴルで北アジア地域会議が開催される予定である。

全体を通しての感想は以下のようである。①マッコイ氏の「米

国こそが核廃絶の最大の障害で

ラウンとソ連のチャゾフ両医師の呼びかけで創設され、二人が共同会長となって運営されてきた。今回まではマレーシアのマッコイとスウェーデンのウエストバーク医師が共同会長を務めているが、マッコイ氏は今回で退任した。後任については大会後の理事会で選出されるが、アフリカから選ばれるようである。

発展途上国では、核戦争よりも、今、目の前で起きている小火器による戦乱と殺戮、それらによってもたらされている飢餓などに、より大きな関心を持たれるのはある意味ではやむを得ない事かとも思われる。冷戦時代とは一味違う運動体へと変わっていくのであろうか。

次回のIPPNWの大会は二〇〇八年インドのデリーで開催される予定。道理で、インドからの参加者が目に付いたのも納得できた。来年六月には、モンゴルで北アジア地域会議が開催される予定である。

全体を通しての感想は以下のようである。①マッコイ氏の「米

国こそが核廃絶の最大の障害で

ラウンとソ連のチャゾフ両医師の呼びかけで創設され、二人が共同会長となって運営されてきた。今回まではマレーシアのマッコイとスウェーデンのウエストバーク医師が共同会長を務めているが、マッコイ氏は今回で退任した。後任については大会後の理事会で選出されるが、アフリカから選ばれるようである。

発展途上国では、核戦争よりも、今、目の前で起きている小火器による戦乱と殺戮、それらによってもたらされている飢餓などに、より大きな関心を持たれるのはある意味ではやむを得ない事かとも思われる。冷戦時代とは一味違う運動体へと変わっていくのであろうか。

次回のIPPNWの大会は二〇〇八年インドのデリーで開催される予定。道理で、インドからの参加者が目に付いたのも納得できた。来年六月には、モンゴルで北アジア地域会議が開催される予定である。

全体を通しての感想は以下のようである。①マッコイ氏の「米

ある」の発言に象徴されるように、北京大会に続いて、米国の一極支配の構造、ダブルスタンダード、などが名指しで批判されたこと。②一九九六年の十二回大会頃までは、「核廃絶」は究極の目標、との発言が主流であったが、「核兵器の廃絶は緊急の課題である」とのフィンランド外相の発言に象徴されるように、全ての発言が「核廃絶」を明確にしていたこと。③「核抑止」論は妄想であることがコセンサスとなっていること。④エネルギー問題として考えても、原子力発電はクリーンでもなく支持できないものであることが強調されたこと。⑤従来は、どちらかと言えば「ロビー活動」に重点が置かれていたように思われるが、医師として患者に語りかけ、理解を広げよう、との行動提起が為されたこと。⑥医学生生の参加が多く、医学生代表からも理事が選出され、重要な役割を担うことになったこと。

### フィンランドに学ぶべき点

ヘルシンキでは、時を同じくしてASEM6(第六回アジア・ヨーロッパ首脳会議)が開催さ

れ、私達が宿泊したホテルにも東南アジアの首脳が宿泊したようで、ホテルの出入りが空港並みの手荷物検査とボディチェックがあったことや、街中で突然通行が遮断され、首脳を乗せた車列が優先される場面に遭遇した。街中に警察官がやたら目に付いたが、おかげで治安がいつもに増して良かったかもしれない。

フィンランドは、人口五百二十万ほどの国であるが、今、世界で学力が最も高い国として有名になっており、日本からも行政や議会などの視察が目白押しとか。フィンランドの教育は、留学生を含め、学費が無料で、日本のように学力と「親の収入に相関がある」というのではなく、能力があれば経済的に恵まれているという進学できる制度になっている。そうすれば、自らの能力を、自らの経済的欲求を満たすだけでなく、社会に貢献するという考え方が強く出てくると思うのは間違っているのであらうか。

以前、スウェーデンの福祉施設を見学した時に、「日本からは、政府関係者や議員さん達も含めて多くの方がスウェーデンの福祉を学びに来られたが、その後日本の福祉はどのように改善されましたか」と聞かれた。皮肉ではないかと思いたいが、ドキッとしたことを覚えている。フィンランドを視察した政府関係者が、こうした点をフィンランドの教訓として学んで帰ってくることを期待したいものである。

### I P P N W ヘルシンキ大会に参加して

堀場 英也

ヘルシンキには、関西空港と中部国際空港と二班に分かれて出発。私は、中川・山本医師と通訳の野崎・鈴木さんの五人で中部空港を七日(木)の午前十一時に出発。殆ど同時に着く。その後バスで案内されてホテルへ。殆ど顔なじみの皆さんで和気藹々だった。大会会場で会員登録を済ませ、レセプションに出席。その席でカナダのアシユフォード女史に会えた。彼女はいつもロビー活動に忙しく駆け廻っていた。マレーシアのマツコイ共同会長にも会えた。七年

前の北東アジア地域会議が北京で開催され、私も出席した。日本では東海村の事故があり、「新ガイドライン法」が強行採決された年であった。富樫事務局長(新潟)が日本の情勢のことを述べた。日本支部の医師が「そういう考えもあるが」と反論、一時しらけたが。その前に、マツコイ会長から非常にきびしい日本に対する危惧の念の発言があった。無理もない。マレーシアは嘗ては日本の経済援助を必要とし、日本政府べつたりであった。十五回のワシントン大会で共同会長となった。その後での北京での発言であった。そして、今回のヘルシンキ大会では、マツコイ氏はリタイアを宣言。残念ではあるが潔い身の引き方で、日本の武士道を彷彿させる。児嶋先生と二人で、寄せ書きをさせて頂いた。次の共同会長はアフリカからで、地方会議はモントールのウランバートルで開催と。もう一つの話は、一昨年広島で北アジア地域会議が開催されたこと。放影研の横路謙次郎氏(被爆者)は約十年以上に亘って中国の医学生(主に北京大学)

に被爆の実相の教育訪問された。北京、ネパール、モンゴルから学生が十名程来日し、壇上で挨拶。やっと北京大学の掲示板に被爆者の写真、パネルが掲示されることが決定した。百聞は一見にしかずが若者に一番必要と感じた。

ミホ・シボさんの話。実家は金谷の魚問屋であった。被爆まぐろで廃業。その後、仏蘭西語を勉強。仏蘭西人のご主人と新婚旅行に広島へ行き、原爆資料館でショックをうけ、ご夫婦で反核の決意をされたこと。

最後に、この現状を打開するために、今こそ、日本の運動が世界の人々から求められている事を痛切に感じています。

▼I P P N W 世界大会(フィンランド・ヘルシンキ)への代表派遣カンパのお礼

二〇〇六年九月に開催されたI P P N W 世界大会参加のために、十七人の先生方から一三一、〇〇〇円のカンパをいただきました。ご協力ありがとうございました。

**第17回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい in 横須賀**

**核の傘はいらない、はばだけ平和憲法**

余りが参加しました。

昨年十月二十一日・二十二日、神奈川県湘南短期大学を会場に開かれた第十七回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどいの報告です。つどいには、全国から医学生などこれから医師の反核運動を引き継ぐ若い世代も含めて百六十人



横須賀・湘南短期大学の教室を会場に開かれた

**戦争犯罪人の追及が必要**

大川 浩正

□記念講演

ドキュメンタリー

「チンチン電車と女学生」

テレビ  
ディレク  
ター・堀川  
恵子さんの  
お話。戦時  
中広島電鉄  
が女学校を  
つくり、午  
前中は授  
業、午後は  
電車運転の  
訓練。その  
うちの生存  
者を訪ねる  
番組。数百  
万人の成人  
男子が戦地

に送られ、その穴埋めに動員された。

彼女たちを訪ねると電車を運転していた頃の楽しかった話ばかり出てくる。戦争中、特に原爆の悲惨な話がなかなか出てこなかった。あとで、ああこれが彼女たちの青春だったのだと気がついたと。

□第一分科会

七三一部隊問題

凍傷治療の研究として中国人を実験材料とした。なかには生後三日（これまで三カ月と伝えられていた）の人間を使った報告がある。氷水に手をつけたり、ぬれたまま寒風にさらしたり、指が凍傷でもげて取れるといった実験。しかも戦後そういつた研究で学位を請求。

以下討論

先輩たちは当時大学の研究費が乏しいなかで、七三一部隊では金も時間も潤沢だと誘われた。一九八二年の名大校友会報に渡辺誠氏（一九四二年卒）が投稿。七三一部隊を弁護して「徒に一発の弾丸で処刑されてゆく人命を少しでも活用して…」と。

地方都市の温厚な開業医だったのだろうと思いますが…。

④さらに話は南京大虐殺などに及んだ。ここで私が話したのは次のとおり。

太平洋戦争で死んだ日本軍（軍人・軍属・準軍属）二百三十万人の六割百四十万人は餓死であるという。自国兵士さえ養えない日本軍隊が、南京市を占領してさて数百万人の住民をどうやって養うのか。この難問の解決策が「やっちまえ」の基本にあるのではないか。

私が怒りを禁じえないのは「生きて虜囚の辱めを受けず…」ということ。ハーグ交戦法規によつ

て、戦闘能力を失った兵士は殺してはならぬ、捕虜として一定の食料を給し、適当な運動、休養などを保障することになって

いる。軍は弾薬や食糧が補給できなくなれば、前線に対して降伏を勧告すべきだ。そうすればこの百四十万人の戦病死者は死なずに済んだのだ。

小泉さんが靖国神社に参拝して「英霊に哀悼の意を表する」などという。遺族会は「悲惨な死を強いられた若者たちの無念さを思い、大量餓死をもたらした日本軍の責任を問う」べきではないか。日本国民として戦争犯罪人追及をやるべきではないか。

【第一分科会】

日本国憲法を考える

平和と医師の役割

室生 昇

冒頭、刈田啓史郎先生から「旧日本軍七三一部隊下の研究から医師・医学者の生き方を問う」が報告された。その主な内容は、「中国での生体実験・細菌戦研究、満州医科大学を含む大学を

も巻き込んだ軍事医学研究の組織、その実験研究はハルビン日本領事館が七三一部隊に送り込んだ抗日中国・朝鮮・ロシア人だけでなく、一般住民をも犠牲にしたこと、それに関与した医学者たちが反省もなく、戦後、日本医学界の中枢にいた。それは、アメリカが七三一部隊の研究業績の取得と引き換えに同部隊のトップ石井をはじめ、関係者の犯罪を不問にしたことによる。若い有能な医師が、七三一

部隊の研究などに参加した要因について」など。

討論の中で、上官の命令に反して生体実験を拒否し、戦線へ送られた故横山正松福島医大教授の勇気ある行動、日本軍の「蛮行」に加担した罪悪を告白し、その償いに努力している医師の報告もあった。

私から、戦前、愛知で反戦平和と医療の民主化のために弾圧に抗して闘った青本文次・米沢進先生の業績を紹介した。北朝鮮のミサイル・核実験があつた今日、平和憲法の重要性和、今後の活動についても討論された。

戦中の医師・医学者が時の政府の侵略戦争政策に追隨して行った行為の反省の不十分さは毎回世界医師会議でも指摘されているが、議題に取り上げられていない。来年の医学会総会時に、

「十五年戦争と日本の医学医療研究会」が企画している展示会、

シンポジウムなどの重要性が指摘された。この分科会は、原水爆被害や戦争体験と反核・平和運動を若い世代が継承するに相応しいとして、若い医師や医学生の参加が多く、司会も若手で行った。

〔第二分科会〕

米国の世界戦略と首都圏の核基地化

現実を直視せよ！

土井 敏彦

第二分科会「米国の世界戦略と首都圏の核基地化」に参加して、率直に思ったのは、日本はアメリカの家来としてその核戦略態勢に深く組み込まれてしまつていて、もはや抜き先ならぬ所まで来てしまつていゝのではな

（〇六・六・三「反核医師の会・愛知」二十四周年記念講演）。

第二分科会では、五人の報告者が首都圏の実態を報告した。

①「首都圏の核基地化について」

呉東正彦氏は、反核医師のつどい・横須賀集会の特別講演者で、原子力空母の横須賀母港問題を考える市民の会共同代表（弁護士）である。原子力空母自体の危険性。原子力空母の母港化の危険性（空母原子炉の軽修理活動での放射能漏れの危険性、基地内での原子炉停止、修理中、修理後の再稼働、出力調整時等の事故発生した事故の修理のため、放射能を出したまま帰港する事態がありうる）を指摘した。

また、軍事機密として情報公開がされない、日本の法律が適用されず、ブラックボックスのままとなる、条件付きにせよ、一旦母港化を認めてしまつたら、その活動を次々拡大する危険が大きいことを指摘した。その歯切れの良い報告の迫力は、職業柄とはいえ大したものだと感心した。

②「キャンプ座間への米陸軍第一軍団司令部移転」鈴木和宏氏

（神奈川県平和委員会）は、米軍再編の一環として、UEX（展開可能な軍）司令部配置、自衛隊との共同を計っていることを報告。

③「米軍所沢通信基地の強化と核戦争指令機能」平山武久氏（反核医師の会事務局長）

は、以前愛知で話してもらつたことでもあるが、横田複合通信基地が、米大統領の核攻撃の指令を出す通信基地になつていゝことを暴露し、地元で衝撃を与えたことを報告。

④「北富士演習場における米軍演習」桜井真

作氏（米軍演習の北富士移転に反対する山梨の会）と、⑤「米軍再編」と百里基地と米軍F15訓練移転」小池悦子氏（核戦争を防止し平和を求めめる茨城医療人の会）は、それぞれの活動を報告した。

全体として、首都圏での生々しい実態がよく理解された。これらを知ることが、広く市民に知らせて行かねばならない。と同時に、愛知・東海での実態を、我々もよく知る必要があると痛感した。

〔第三分科会〕

被爆者医療と原爆症認定集団訴訟国の非科学性をきびしく糾弾

徳田 秋

氏が、本番さながらの証言を披露した。

つづいて、長年にわたつて県の認定指定医を勤めてきた、神奈川さがみ生協病院長・長谷川倫雄氏が「医師から見た原爆行政」を報告。

その中で昭和三十三年八月に

基調報告は「原爆裁判とは」と題して、池田真規弁護士に誘われて東京弁護士団に加わつた、弁護士生活六年目、新進気鋭の田部知江子氏が熱弁をふるつた。

次に東京裁判の模様が寸劇で示され、証人として出廷した、静岡きたはま診療所長・間間元

国が公衆衛生局長通知として示した原爆後障害の診断・治療の指針が、今年三月、理由を示すことなく廃止されていたことが知らされた。

これらの通達は、その前年に制定された「原爆医療法」を補充し、被爆者健診や診療の基本

を示したもので、内部被曝にも影響を評価するのは不可能として、測定値になんらの補正も加えず、言及した、妥当な内容であった。琉球大学理学部の矢ヶ崎克馬教授が、国の原爆症認定基準を批判的に検討した(月刊保団連 二〇〇六年十月十一月号参照)。

国は、残留放射線の積算線量を極微量としているが、その根拠はDS86の第六章である。しかし、この報告書に記載されている残留放射線量は、最も早いものでも原爆投下後四十八日後に測定されたものであり、これは短い半減期なら、すでに崩壊がほとんど終った時期である。

また、広島・長崎両市とも、九月十七日の枕崎台風に襲われ、埃のかたが地上を覆っていた放射線降下物がこの台風の影響を受けなかったとは考えられない。ところがDS86は、風雨の影響を評価するのは不可能として、測定値になんらの補正も加えず、後段の総括で突然「風雨によってその大部分が流されなかった」と仮定すれば」とその影響を無視している。

さらにその上、国は、残留放射線を浴びたり、体内に摂り込んだりした人びとを「非被曝者」に仕立て上げ、原因確率論のコントロールにするという、作為に満ちた暴挙をあえて行っている。

講演の後半では、僅か一マイクログラムの放射性降下物が每秒六億個のベータ線を放射し、これが体内に摂り込まれば、急性原爆症の発症には充分であること、及び、原子雲の広がった地域に、放射性物質の二五%が降り注いだとすれば一平米当たりほぼ一マイクログラムとい

う計算になるなど、遠距離被曝者や入市被曝者に原爆症が現れるのは当然であることが雄弁に語られた。

【第四分科会】  
「劣化ウラン兵器を考える」報告

浅野 晴義

最初の演者は、フォト・ジャーナリストの豊田直巳氏。アジア、ユーゴスラビア、中東、パレスチナ、イラクなど世界各地取材した豊田氏の話は冒頭から世界的。ただし、イスラエルのレバノン占領問題に時間が長く割かれたのは感心できない。

もっとも、これらの話題が後からの、自衛隊のイラク派遣の誤魔化し、さらに自衛隊活動の無意味きの説明の前置きになっていたのではあるが。劣化ウラン弾に関する氏の立場は、被害者の側に有害性の立証責任があるのかのとき状況はおかしいし、また、本国では、それを持ち込むことも所持することも違法とされる放射性物質

の劣化ウランが安全とする宣伝が行われているのは不思議である——ということに尽きる。

二番目の演者は慶応大学物理学教室の藤田祐幸氏。氏の話はコソボ、ボスニア地域の劣化ウランの調査から。対戦車攻撃で普通命中するのは二千発に一二発。残りの弾丸は地面を貫通する。氏の調査でも地面にいた穴から放射線が検出できた。燃焼して微粒子となって体内にとりこまれる酸化ウラン細粒の被害は別として、環境残留ウランの汚染もこれからは問題となるであろうとのこと。

イラクでは破壊された戦車の劣化ウラン弾貫通痕と放射線(ガンマ線)の関連を追跡。バグダッドのバンカー・バスターの貫通痕からも放射線が記録されたとのこと。

最後の演者は、ウラン兵器禁止を求める国際連合(ICBUW)評議員である医師の振津(フリツ)かつみ氏。振津氏は、主として国際的な劣化ウラン弾禁止への動きと、劣化ウラン兵器の非人道性、蓄積性、環境汚染問題等々を中心に話を進め、この禁止に取り組む日本の現状お

よび世界各国の運動の状況を説明した。

兵器としての劣化ウランの問題は次第に各国で取り上げられるようになってはきたものの、署名数などは日本では約二十万人分とまだまだ少ない。イラクで発表されてきたガンや先天的異常の統計をより正確にして、国際世論の圧力を強めて使用禁止にもっていくべき必要性が強調された。

討論では、韓国や沖縄の米軍基地にあるとわかった劣化ウラン弾の問題、今後私達が進めるべき運動のあり方や各地の運動の状況など、時間は十分ではなかったが、有意義な意見の交流がすすめられたと言える。

▼反核医師の会・愛知の活動抗議文・「非核三原則を持つ被爆国日本で核保有論議は許せない日本政府は核兵器全面禁止国際協定実現の先頭に立って奮闘を」(二〇〇六年十二月二十一日) 安倍首相、麻生外務大臣、中川自民党政調会長へ送付した。

●会費納入のお願い●

二〇〇六年度の会費の納入をお願いいたします。郵便振替用紙をご利用いただくか、次の銀行口座あてにお振り込みください。

■三菱東京UFJ銀行・八事支店 普通預金108-297  
「核戦争に反対する医師の会」  
\*ご不明な点などございましたらお手数ですが、ご連絡ください。 ☎〇五二一八三二一三四五